



グローバル人材について最近思うこと

NPO 法人国際人材創出支援センター理事長 まつだいら つねかず
元 ITU-T SG3 議長 松平 恒和



グローバル人材育成の必要性が指摘されて何十年経っただろう。

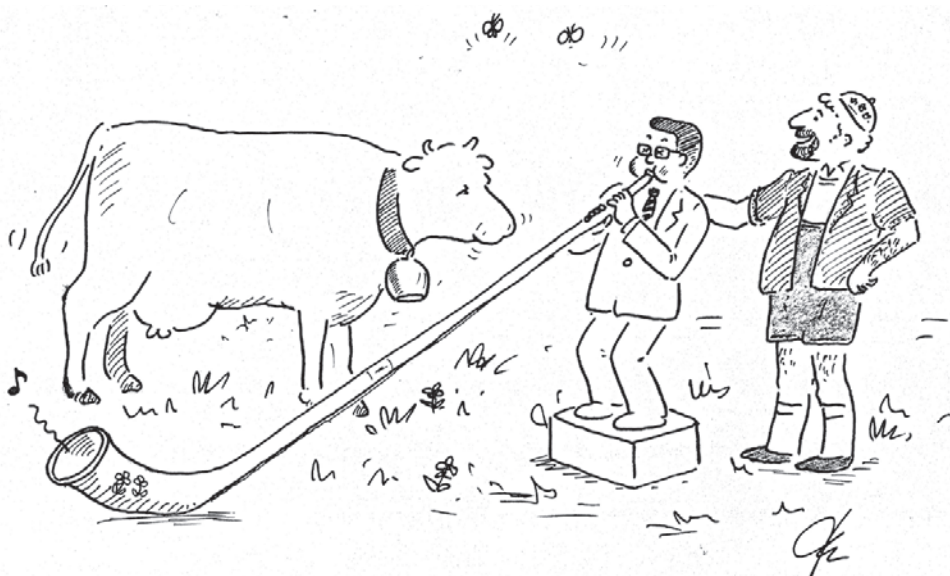
日本が世界から遅れをとらないよう、政府の各省庁、経済団体、自治体、大学をはじめとする教育界等々で「グローバル人材育成」の必要性が唱えられ、その定義が試みられ、そのための手法が検討されてきた。グローバル人材教育のためのビジネスも多数設立され、また多くの大学に「グローバル〇〇学科」が新設された。その間、ICT、AI技術の飛躍的な発展に支えられ、社会のあらゆる分野でグローバル化は加速度的に進んでいる（国際政治の世界では一国主義の動きがあるが）。

一方、スイスのビジネススクールIMDが毎年発表する世界競争力ランキングの2019年版において、日本は対象63か国中30位となり前年から5ランク下がった。因みにトップはシンガポール、中国は14位、韓国は25位である。この調査が始まった1989年から4年間日本は1位であった。その後ランクをほぼ一貫して下げ続けているのは日本だけである。IMDのランキングが全てというわけではないが、官民挙げでのグローバル人材育成の成果はあまり出ていないのかもしれない。

さて、「グローバル人材」に必要とされる能力もいろいろ指摘されてきたが、集約してみると以下に絞られるのではないか。

- ・異文化、多様性への理解
- ・コミュニケーション能力
- ・論理的思考
- ・日本人としてのアイデンティティと教養

いずれももっともな要件と思えるが、一方で、そもそもグローバル人材という用語は和製であり、そのような概念は英語には見当たらないとも言われる。確かに、例えばアメリカ人とやり合った国際交渉を思い出して、相手が上に挙げたグローバル人材の定義に適合していたかと考えてみると（4番目の「日本人」を「米国人」と読み替えたとしても）必ずしもそうではない。余談だが、以前、色々な国の人に記憶だけを頼りに世界地図を描かせる興味深い実験を見たのだが、総じて日本人が描くものは比較的正しく、もっともいい加減だったのはアメリカ人で、地図のどこにも日本がないというものも多かった。筆者の経験から、ひょっとするとアメリカ人ほど国際的でない人種はいないのではないかとさえ感じる。つまり、日本が国際競争力を高めるためには



海外駐在員の課題 — 現地社会との融和 — (絵 松平恒和)



グローバル人材の育成が必要だが、その結果育成されたグローバル日本人が相手にするアメリカ人あるいは他国人は必ずしもグローバル人材ではない、という妙な構図になってしまふ。

上記定義の中で理解が必要とされる「異文化」にしても、例えばアメリカ人やアラブ人が日本の企業文化や日本人の価値観を一般的に理解しているとは思えない。考えてみると、欧米あるいは他の地域の人達に上記定義の諸要素はグローバル人材かどうか以前に生まれつき備わっているのではないか。歴史上様々な国や民族や宗教が入り乱れ、争ったり交わったりを繰り返してきた。相手や自分の強み、弱みを理解し、自分の主張や権利を守りあるいは拡大するため声を大にし、論理を構築し、自らの拠り所と同胞を大事にする。これは彼らにとって何もグローバルな話ではなく、人として生活していく上で当たり前の用件なのだと思う。世界の大多数の人間に当たり前のことがすなわちグローバルスタンダードとなる。

翻って日本では先人たちのお陰で、あるいは地形的な要因もあり、その長い歴史の中で民族や宗教が争ったりすることもほとんどなく、世界にも稀な、多様の反対である一様で穏やかな社会が形成されてきた。明確なコミュニケーションをせずとも以心伝心で伝わる。論理は大事だが情緒も必要だ。自己を主張する前に相手を気遣う。日本人としてのアイデンティティは全員共通なので意識しない。

きっとこれは大変恵まれた、幸せなポジションに違いな

いのだが、残念ながら世界的な当たり前、グローバルスタンダードとはなっていない。

日本人は何かにつけジャンル分けすることが好きで、ヒト、モノ、コトなんでもそのジャンルに当てはめようとする傾向があると感じるが、ここでも「グローバル人材」というジャンルを作ってそこに当てはまる人材をイメージしているのではないか。

以上のようなことをつらつらと考えると、私なりの結論が次のように見えてくる。敢えて「グローバル人材の育成」などと大袈裟に構えなくとも、日本や日本人がグローバルに活躍するために心得ておけばよいのは、

- ・異文化、多様性のへ理解：つまり世の中は一様ではないということ。
- ・コミュニケーション能力：つまり声に出して言わないと相手に伝わらないということ。
- ・論理的思考：つまり情緒より論理に重きを置いたほうが強いということ。
- ・日本人のアイデンティティと教養：つまり自分のことを聞かれたら説明できたほうがよいということ。

すなわち、グローバル人材にとって必須なことというより、人が社会で生きていく上で当たり前の常識を心得ていればよいのだ。大上段に構えなくとも、そんな気持ちで取り組みれば世界でも国内でも活躍することはさほど難しいことではないと思うのだが。



海外駐在員の悩み — 日本文化に関する知識の欠乏 — (絵 松平恒和)